

創刊 5 周年

きものの入り口 提供したい

京都起業家学校第1期卒業生できものリサイクルを始めた田中京子さん

「きものを着る機会は今、ほんとになくなっていきますね。機会があっても、みんなで高い礼装を着て園遊会に行くぐらい。この園遊会も一度出るために数万円かかる仕組みになっている。こんな仕組みでは、よほど生活にゆとりがある人でないときものを着ることはないんだと思うんです。

「これから商売をしていくことは大変だと思います。今は、きもの入り口からどのように和装の世界に興味を持ってもらえるかが課題だと思っています。例えば、着るに耐えないきものは細かく裂いてまた織り直すという裂織という手芸もある。友禅や西陣織を使った手芸品が自分の手で簡単に作れる教室を開いていく予定です。

【きものリサイクルショップの経営ビジョンを聞くインタビューで。6月24日掲載】

2002年 はどんな年だったのか。
京都で活躍するこの人たちのこの一言で
振り返る。

ベンチャーだって
ボランティア
カスタネット社長の植木力さん



「営業マンが顧客の下へ足を運ぶ『顔の見える通販』を目指しているので、営業マンにとって今回の活動を口実に顧客企業に足を運ぶ機会が増えます。協力を依頼するとき、不要な文具を回収するとき、と何度も足を運べば顧客との関係を強化できるしパイプも太くなる。また、新規に顧客開拓をすることにもつながります。

「もちろん、ボランティア活動だということを忘れたわけではありません。そもそもの出発点は、余っている文房具を再利用できないかということ。大量に買って大して使わずにすぐに新しい文具を買う、ということにオフィスは鈍感だと思うんです。カスタネットも顧客企業が順調に伸びてきて、多少の余裕があると言えるくらいになりました。手の届く範囲でまずは始めてみようと思っています。

【ボランティア活動のメリットを聞くインタビューで。3月25日掲載】

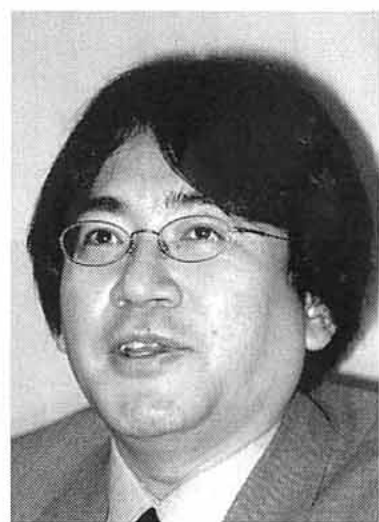
この人の一言啓上

専門家だったら取れなかった

島津製作所エンジニアの田中耕一さん

「(大学時代の専攻が電気だったので)入社以来、化学という畑違いのことをやってきた。自分の専門分野だと積み上げていくという研究スタイルになると思う。しかし、私は化学の分野で素人。だからこそ、知識にとられなかったと考えています。専門知識があったら常識を打ち破ることはできなかったかもしれない。

「私はどうもほかの人とは違う考え方をするようで、周りから“変人”とされています。人と違うことを考えて、人と違うことをすると失敗することも多い。でも人と違うことをしたから、新しい分析手法を発見することができた。そういう意味では幸運だと思います。【ノーベル化学賞の受賞決定を受けて開かれた記者会見で。10月16日掲載】



「日本の市場へゲームソフトを送り出すことは、お腹がいっぱいの王様に料理を作っている気分になる。

「正直に言って、ゲームのクリエイターやプログラマはみんなネタ切れの状況。だからこそ、ロールプレイングゲームでマップが変わっただけだったり、グラフィックが良くなるだけではだめだ。世界中の人に売れてミリオンセラーになるゲームソフトをいかに生み出すかが課題。そ

「満腹の王様に料理を作る気分」

任天堂の岩田聡社長

「今年の初めに社長室に呼ばれた。山内が任天堂の経営についてとうとう話し出し、私は『えらいことになったな』と思った。言外で2人とも私が社長に就任することを確認した。

のためにも、これまでの既成概念を打ち破る新しい遊び方を考える必要がある。【社長に就任して初めて開いた会見で。6月3日掲載】

経営と技術は車の両輪

京都大 VBL 施設長・IIC センター長の松重和美さん

「京大は全国でも有数の総合大学。ナノテクをはじめとする工学的な先端研究も豊富です。シーズ(事業化に結びつくような新技術)が先行しているワケです。企業や社会のニーズから研究を組み立てることも非常に重要だが、せっかく先行しているシーズを使わない手はありません。

「技術だけがあって新規事業ができないのは当然です。優れた技術があると言うのは十分条件で、必要条件としては世の中が何を必要として持っているのかを見極める目が要ります。私も世話人を務めるMBAの研究会で吉田先生(経済学部吉田和男教授)に、『MOT(技術マネジメント)もつくれないか』と提案してるんです。【京大の産学連携の戦略を聞くインタビューで。2月25日掲載】

